

幼稚園における音楽アウトリーチの可能性

萩原 恵里 木村 文子

(小田原短期大学通信教育サポートセンター大阪)

1990 年代後半より音楽の分野においてもアウトリーチ活動の概念が知られるようになり、文化施設や芸術団体の間で注目されるようになった。1998 年の学習指導要領改訂をきっかけに、小学校を中心とした学校教育へもその活動が参入していくなかで、保育園・幼稚園等の保育施設でもアウトリーチ活動が行われるようになった。しかし、保育施設で行われるものの多くは、単発のイベント的なコンサートであり、その場限りの活動のなかで教育的意義が見出せない状態である。そこで本研究では、筆者達が実際に行った幼稚園での音楽アウトリーチを実践事例として取り上げ、保育者へのアンケート調査、ビデオ記録をもとに幼稚園における音楽アウトリーチの可能性について考察を試みた。その結果、アウトリーチ活動を継続的なものとするために、実践者側の 3 つの課題を明らかにした。

キーワード：音楽アウトリーチ、幼稚園、継続的、コミュニケーション構築

1. はじめに

欧米の流れを受けた形で、1990 年代後半より日本でも音楽アウトリーチ活動の概念が知られるようになった。その活動範囲は、学校や病院、福祉施設をはじめ、近年では震災被災地の復興支援として行われるなど広がりを見せている。なかでも学校で行われるアウトリーチ活動は、1998 年の学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間の導入や、中学校の音楽教科において和楽器の使用が入ってきたことで、小・中学校を中心に学外の音楽専門家が授業に参入する機会が増えたことが普及要因といわれている。一方、幼児を対象とした音楽アウトリーチ活動は、小・中学校のような教育制度に起因した広まりではないものの、現在でも、保育園や幼稚園等の保育施設へ音楽家が出向く形で行われている。生きる力の基礎を培う幼児期にこそ音楽を身近で聴くことは、幼稚園教育要領の保育内容表現のなかで示されているねらい「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」においても、直接的・具体的な体験を通した涵養の機会として、有意義であると考えられる。しかし現在、保育施設で行われているアウトリーチ活動の多くは、単発のイベント的なコンサートが中心であり、子ども達の育ちにどのような影響を与えられているか、その効果を測るまでに至っていない。小学校での音楽アウトリーチ活動においても、継続的な実施は課題であり（梶田 2009, 2011、原 2016 他）、その原因として梶田は、教師も継続性について否定しているわけではないが、その一方で、アウトリーチの位置づけや、効果に戸惑いを感じていると述べている⁽¹⁾。原は、近年アウトリーチ活動が、文化施設や芸術団体等の提供側から、地域や学校にアプローチして実施している側面が強調されている結果、イベント的なコンサートが中心となり、アウトリーチの効果や意義についても十分に検討されていないことを指摘する⁽²⁾。このように、享受する側も継続的な音楽アウトリーチに対する期待はあるものの、その活動の潜在的価値が明確に示されていないことで、実施に躊躇してしまう実態がある。

以上を踏まえて、本稿では、保育園や幼稚園等の保育施設における音楽アウトリーチの場合はどのような課題があるのかという問題意識から、筆者達が実際に幼稚園で音楽アウトリーチ活動を実践し、そこで行った保育者へのアンケート調査や、ビデオ記録をもとに、幼稚園での音楽アウトリーチの可能性について考察を試みる。

2. アウトリーチとは

アウトリーチ（英：outreach）とは、英和辞典によると「1. 手を伸ばすこと、手を差しのべること 2. (地域社会への) 奉仕〔援助・福祉〕活動（公的機関・奉仕団体の）現場出張サービス」といった意味

で訳される⁽³⁾。特に社会福祉の分野において、援助が必要であるにもかかわらず、自発的に申し出をしない人々に対し、公共機関等が積極的に働きかけて、支援の実現をめざす取り組みのことを指す用語として、「アウトリーチ事業、アウトリーチ支援」と呼ばれている⁽⁴⁾。

このような意味をもつアウトリーチから派生して、科学や芸術の分野でも、アウトリーチ活動として様々な取り組みが行われている。科学分野では、文部科学省が「社会全体にとって望ましい方向で科学技術が発展していくためには、国民の興味関心を高める必要がある」というねらいから、研究者による講演会やワークショップなどのアウトリーチ活動を推進している⁽⁵⁾。芸術分野では、芸術家や芸術団体、文化施設等が、日頃芸術に触れる機会の少ない市民や地域に、もっと身近に芸術を感じてもらおうと、演奏や美術作品、舞台作品の鑑賞をはじめとする芸術の提供を、アウトリーチ活動として実施している。その活動範囲は、学校や病院、福祉施設等を訪問して行うといった、アウトリーチ本来の意味である「手を伸ばすこと、差しのべること」に近い、提供側が享受側の場へ出向くものから、ホールで行われる鑑賞事業や、芸術に関するシンポジウム、講習等、芸術を普及する総ての活動まで含まれている。本稿は、幼稚園で行われる音楽アウトリーチについての論考であるため、その中でも特に、享受側へ出向く形でのアウトリーチ活動について概観していく。その前に、日本でアウトリーチ活動という言葉が注目され、活発に行われるようになった時期や背景について、ここで少し触れておきたい。

まず、アウトリーチ活動が日本で知られるようになった時期は、1980年代頃であるといわれている⁽⁶⁾。欧米ではそれ以前から、日本でアウトリーチといわれる活動と同様のことが行われていた。例えば、アメリカでは、1970～1980年代の景気低迷期における財政難の打撃を受け、学校教育のなかで芸術科目が削減されていった。そのことによる弊害の対応策として、学校に芸術家を派遣する教育プログラムの取り組みが行われた。日本で行われている芸術分野のアウトリーチは、欧米のこうした活動から影響を受け、美術館や博物館による芸術を普及させる活動から始まり、1990年代後半頃になると、それが音楽にも波及していった⁽⁷⁾。では、なぜ日本がアウトリーチ活動に注目したのか。一つの背景として、1980年代後半～1990年代にかけてのバブル景気から、その破綻に至る日本経済の激動があげられる。1980年代後半以降、地方自治体による文化ホールや美術館、博物館の建設が相次ぎ、「ハコモノ」としての文化施設が充実した⁽⁸⁾。しかし、バブル崩壊後、ハコモノ行政を批判されるようになると、今度は、文化施設の存在価値が問われることとなり、地方自治体は公共ホールの活用や、鑑賞者獲得のための様々な工夫を凝らした取り組みを行っていかねばならなかった。こうした経緯から、日本でアウトリーチと呼ばれる活動が活発に行われるようになっていった。

2-1. 学校教育における音楽アウトリーチ

学校教育での音楽アウトリーチについては、既述したように1998年の学習指導要領改訂以後、学校の授業に音楽家が参入する機会が増えたことが契機となった。それ以前にも、学校では芸術鑑賞を目的とした活動として、1960年代後半以降「鑑賞教室」と呼ばれる取り組みは行われていた⁽⁹⁾。しかし、アウトリーチ活動が従来の鑑賞教室と異なるのは、少人数を対象にしたワークショップ形式の活動が中心となっている点で、より深い芸術的な体験を、子どもたちに提供していることである。例えば、子どもと音楽家が身近に交流できるようなプログラムや、子どもが実際に音楽を体験できるような工夫がなされている。齊藤(2013)は、音楽アウトリーチの活動を「鑑賞系、創造系、技術指導系」と、大きく3つに分類し、学校での音楽アウトリーチが多様になってきていることを述べている⁽¹⁰⁾。林(2003)は、学校と連携したアウトリーチ活動として、小学校の授業に音楽家を導入した実践を継続的に追い、その効果や課題について論じている。その中で、学校と連携したアウトリーチ活動の意義として、音楽家が学校へ出向くことで、より多くの子どもに音楽と触れ合う機会を与え、その体験が音楽への興味や、理解を示す人々を生み出すことにも繋がるという。また、学校と連携したアウトリーチ活動は、教師との協働により、学校のカリキュラムに沿った活動を行うことで、子ども達のより深い学習となることについても述べている⁽¹¹⁾。小学校において、単発型と継続型の音楽アウトリーチを自身が実践した梶田(2011)は、継続型は単発型でみられるようなインパクトは初回だけであるが、それ以降、興味関心が

内容の方へ移行し、子ども達は徐々に、音楽そのものへと興味関心の対象を変化させていくと述べている。また、アウトリーチの実施にあたり、単発型、継続型による効果の違いをあらかじめ想定し、学校教育との関連を図っていくことの重要性についても言及する⁽¹²⁾。財団法人地域創造^{注1}（以下、地域創造と略す）が 2010 年に行った調査では、継続的なアウトリーチ活動と単発的なアウトリーチ活動の相違点として、継続的なアウトリーチ活動では、参加者の内面的な変化や、さまざまな人間関係に変化をもたらし、見方や価値観に新しい風を吹き込む可能性がある⁽¹³⁾と報告されている。

2-2. 幼児を対象とした音楽アウトリーチ

保育園・幼稚園で行われる音楽アウトリーチは、学習指導要領の改訂を契機に、その活動が活発化されていった小学校や中学校のような具体的背景はないものの、幼児期の育ちにおいて、様々な音色を耳にする機会や、普段あまり目にすることのない楽器に自ら触れることは貴重な体験である。

2001 年に地域創造が、アウトリーチ活動を行っている劇場・ホール、計 42 館を対象に実施したアンケート調査によると、アウトリーチ活動の実施先（文化施設は除く）として、小学校（47.6%）、中学校（35.7%）の次に、保育園・幼稚園（21.4%）があげられた^{(14) 注2}。この結果について梶田（2011）は、2010 年現在（梶田氏の執筆時）のアウトリーチ活動の現状を知る、十分なデータとは言えないながらも、当年の実践報告数からみて、2001 年の結果と大きな変化はないのではないかと述べている⁽¹⁵⁾。ヤマハ音楽研究所（2013）は、近年、公立の文化施設等をはじめとする団体が催す子ども向けコンサートや、参加型イベント等のアウトリーチ活動が盛んになったことで、子どもの音楽活動の場や機会も多様化したという。しかし一方で、保育園・幼稚園での専門家による音楽活動の実施については、2011 年、2013 年共に、そのような機会は「ない」と回答しているのが、全体の 60%以上を占めており、未だ保育施設でのアウトリーチ活動が普及しているとは言いがたい現状である⁽¹⁶⁾。これについて山内（2015）は、予算や時間の原因だけでなく、環境構成の配慮に起因する課題もあるのではないかと指摘する⁽¹⁷⁾。それはつまり、幼児教育の音楽体験の場としてふさわしい環境づくりを意味している。ここでいう環境とは、音楽家と保育者が連携を深めていけるような関係づくりや、子ども達が音楽家と身近に交流できる雰囲気のもと、体験的音楽教育の場となるようなコンサート形態を構築する等、保育施設でのコンサートのあり方を考えるものである。このような課題を挙げるなかで、山内は特に、保育施設での音楽コンサートとしてふさわしいプログラムについて、自身が継続的に行うコンサートをもとに考察を深めている。しかし、山内が行っている幼稚園でのコンサートは、園側からの依頼により継続的に実施されており、アウトリーチ活動を継続的な実施へつなげる過程については論じられていない。また、幼稚園で継続的なコンサートを行う石川（2007）は、活動が子ども達にどのようなものをもたらし、どのような育ちがあったのかを判断することは、目に見えてすぐ現れるものではないため難しいとはいえども、その活動の価値について問わなければならないと述べる。しかし、実態として、保育園や幼稚園で行われているコンサートの多くは、予算的な問題や、日常の保育との連携の取りづらさ等から、単発の出張コンサートの形態で行われており、日常の保育とは別立ての特別なイベントとして位置づけられてしまう傾向にあるという。そのため、活動の価値が充分発揮されるような実践も多くないのではないかと指摘する。石川は、決して単発でのコンサートを否定するのではなく、例えば 1 回限りのイベントであっても、子ども達の生活にもたらされることにより、そこには何らかの形で、彼らの育ちに寄与するものがあるはずであると述べ、保育施設でのコンサート活動のあり方について考えていく必要があると言及する⁽¹⁸⁾。

このように、幼児を対象としたアウトリーチにおいても、継続的な実践が行われている事例は少なく、その背景には様々な問題がある。石川の継続的なコンサートの場合も、大学と幼稚園側との間に長年の関係性ができているなかで始まったコンサートであるが、では、そのような関係づくりから始まるアウトリーチ活動を継続的なものへとつなげていくためには、どのようにしていけばよいのだろうか。

3. アウトリーチ実践事例

本章では、筆者達が実際に幼稚園で行った実践事例を取り上げ、保育者への事後アンケート結果および、ビデオ記録を分析し、今後の音楽アウトリーチの可能性を探るべく考察を試みる。実践の概要は以下の通りである。

実施日時：2017年12月19日10:00～10:30（30分）

実施会場：N県K市にある幼稚園の2階お遊戯室

参加者：2歳児から5歳児までの在園児79名とその保護者、保育者14名

実践者：保育者養成校の音楽教員である筆者2名が音楽を担当し、同校の男性教員1名が司会、進行を担当

◆◆プログラム◆◆

1. ディズニーメドレー（ピアノ連弾）

2. 映像と演奏による「どうぶつたちのカーニバル」

スクリーンに絵を映しながらお話の朗読と共に、ピアノ連弾やリズム打楽器による効果音を盛り込んだ演奏

3. クリスマスメドレー（ピアノ連弾）

メドレーの最後を飾る曲「ジングルベル」で、司会者が園児達を先導して一緒にうたう。

本実践のねらい：

- ①専門家が奏でる楽器の音色や多様な表現に触れることにより、興味や好奇心を持って音楽を鑑賞する。
- ②生演奏を通じて、園児がその後に続く自分の発表や、クリスマスイベントに期待を寄せて楽しく参加できるよう、明るく和やかな雰囲気の中をつくる。

実践上の留意点：

①について

- ・専門家ならではの音楽的アレンジや、園児も参加できるプログラム、対話的な進行方法について考える。
- ・鑑賞を通じて、園児が今後も主体的に表現遊びを楽しんだり、想像力を高めていくことをめざす。

②について

- ・園児が人前でも緊張せず、普段の練習通り発表に臨めるよう舞台と客席が一体となる雰囲気づくりに努める。
- ・馴染みのある曲や、園児が取り組んでいる歌唱も取り入れ、クリスマス会の各演目に興味を持って参加できる態勢を整える。



図1：「ディズニーメドレー」の様子



図2：「どうぶつたちのカーニバル」の様子

今回実践を行った園は公立幼稚園が前身であり、今年度より認定こども園として2歳児から5歳児までの園児が在籍している。当日は、園の恒例行事である保護者参観も兼ねた「クリスマス会」と合同で

行われ、最初の 30 分間を「音楽コンサート」に充てていただいた。

まず、アウトリーチの実施に際し、先方との事前打合わせは重要である。そこで、実践に先立ち、次のような流れで準備を進めた。①実施園へプログラムの大枠をメールで提案した後、②一度園を訪問し、プログラムについての具体的な構成、会場となる場所の確認、当日の設備や環境に関する話し合い等を行った。打ち合わせ参加者は、本稿筆者 2 名、園長、当日クリスマス会全体を進行する保育者の計 4 名であった。実際に対面で打ち合わせを行うと、園の雰囲気や、子ども達の様子も窺うことができる。また、話題の広がりから、例えば、これまで行ってきたクリスマス会に関する話を伺うことで、その行事に対する園の思いや、方針を汲み取ることができる機会となる。今回の打ち合わせでは、行事における地域との連携についても話が及び、事前にコミュニケーションを取ることの大切さを感じた。

当日のクリスマス会は、最初の 30 分を音楽コンサート、その後 15 分程度の休憩を挟み、園児達の歌や踊りによる出し物がクラスごとに発表された。子ども達の演目後には、先生方が子ども達へクリスマスプレゼントとして楽しい創作劇を披露され、これには園児達だけでなく保護者からも笑いが起き、ほのぼのとした雰囲気のなかで時間が流れた。そして、会の最後は、地元の外国人英語講師がサンタに変装して、園児一人一人にプレゼントを渡すコーナーで締めくくられるといった大きなイベントであった。

3-1. 保育者へのアンケート結果と考察

クリスマス会終了後、音楽コンサートに関するアンケート調査を保育者へ依頼し、後日回収した。当日、クリスマス会に参加した保育者は 14 名、そのうち回収数は 11 件であった（回収率 78%）。各設問と結果は以下の通りである。

問 1. 保育者の保育経験歴

年数	1～2 年	3～5 年	6～10 年	11～20 年	20 年以上	未回答
人数	2 名	0 名	2 名	2 名	2 名	3 名

問 2. 本日の音楽コンサートはいかがでしたか？

① 大変良かった…2 名、②良かった…7 名、③普通…1 名、未回答…1 名

問 3. 鑑賞時の園児達の印象的な反応があれば、お聞かせください。

- ・クラスに恐竜が好きなお子さんがいるのですが、恐竜が出てくるピアノの音やスクリーンを見ると、背筋をピンと伸ばして聞いていました。
- ・3 歳児には少し難しいお話だったようで、途中から集中力が途切れてきたようだった。最初の音楽は聴き慣れていたのを楽しんでいる感じでした。知っている曲があって、自分の好きな曲が流れると身体を動かして喜んでいました。
- ・ディズニーの曲や、クリスマスの曲を弾いていただいた時は、子ども達は嬉しそうに口ずさんだりしていました。
- ・低年齢児にとっては、2 曲目のお話は少し難しく長かったので、途中、集中力が切れてしまった。
- ・生で聴く本物のピアノの音色に、目をキラキラさせて聞き入っていた姿がとても印象的でした。最後まで椅子に座って、しっかり聴くことができていました。
- ・ピアノ演奏は初めて聴く子どもも多く、興味をもって見ていました。
- ・初めて見る連弾や素晴らしい演奏に興味をもっていた。でも、映像を入れての曲が長く、曲も高度なため、集中が切れて、少ししんどかったように思う。
- ・年少児にとっては話が少し長く、集中して聞いていなかったように思う。
- ・静かによく聞いていた。
- ・ピアノの曲と絵本の世界が、幼児の心の中で広がりを見せとても感動しました。子どもたちの表情を見てみると、曲調の楽しさを感じているようでした。
- ・ディズニーの曲はとてもメロディーがきれいで、子ども達も知っている曲が流れていると「小さな世界だ」と言って口ずさんでいた。

問 4. 今後、幼稚園でこのような音楽コンサートが行われることについて

① ぜひある方がいい…3名、②あってもいい…7名、③どちらでもない…1名、④ない方がいい…0名

問 5-1. コンサート開催時期はいつ頃が望ましいでしょうか。

①春（__月頃）…0名、②夏（__月頃）…0名、③秋（11月頃と記入）…1名、④冬（12月頃と記入していたのが3名）…5名、特になし1名、未回答4名

問 5-2. 開催される回数について

①年1回…6名、②年2回…2名、③年3回…0名、④2年に1回ぐらい…1名、未回答2名

問 6. 今後幼稚園での音楽コンサートで、どのようなプログラムがあれば良いと思われますか？

- ・子ども達が知っている曲、例えばアニメ等…
楽器（フルート）等とピアノのコラボ、音楽は情操教育にとっても良いと思うので、すてきな曲をより多く聴かせてあげたい。
- ・園児も一緒に参加できるような曲。アニメや幼稚園の歌などもあれば良い。
- ・園児の興味深いもの
- ・教師も参加する。園児がよく歌う曲、知っている曲などのピアノや楽器などでの演奏。
- ・子ども達が一緒に楽器に触れあえる機会をもっとほしい。子ども達が親しめる曲を弾いて欲しい。
- ・子ども達が興味のある曲を入れていただく。かけ合いをしながら歌ったりも楽しいかとも思いました。（森のくまさんや、カエルのうたなど）
- ・知っている曲、園児が口ずさめる曲などをメインにする方が、より楽しめるように思う。
- ・子どもに人気のあるキャラクターの出ている曲や、話だと興味を持って真剣に参加できるのではと思います。
- ・本日もとても良かったです、子ども達の身近な曲があったのがとても良かったと思います。
- ・園児がよく知っている曲をたくさん演奏していただきたい。スクリーンを使うのであれば、映像だけでなく、お話のようにして下さると、子ども達の集中力が長くもつと思いました。（2、3、4才にとっては、少し長く感じました。）

以上の結果より、まず問 2.で尋ねた今回の音楽コンサートについて、「大変良かった」「良かった」と回答した割合が、全体の 81%であったことから、大方の保育者から満足してもらえたようであった。また、問 4.の今後このようなコンサートが幼稚園で行われることについて、「ぜひある方がいい」「ある方がいい」と回答したのが、全体の 90%を占めていたことより、子ども達が音楽と身近に触れ合える機会をほとんどの保育者が望んでいることが窺える。しかし一方で、問 5-2.の開催される回数については、「年1回」と回答したのが 54%で最も多く、その次に、「年2回」「2年に1回」と続いた。この結果から、アウトリーチ活動が保育者にとって、日常の保育とは別立ての特別なイベントとして考えられている傾向がみられる。

次に、自由記述による問 3.園児の鑑賞時の印象的な反応については、保育者の担当クラスによって意見が二分した。2、3歳児クラスの担当保育者は、2番目の演目であった映像と演奏による「どうぶつたちのカーニバル」の話が難しかったことや、長かったことによる子どもの集中力の切れを指摘していたものが多かった。一方、4、5歳児の担当保育者は、「聞き入っていた姿」「興味をもって見ていた」「静かに良く聞いていた」「恐竜が出てくる音やスクリーンを見ると、背筋をピンと伸ばして聞いていた」といった子どもの反応を捉えていた。このことから、子どもの年齢によってプログラムを考慮することはアウトリーチ活動を行う上で重要である。小学校でのアウトリーチ活動では、多目的教室や音楽室で、学年ごとや2学年ごとに分けて行われていることが多く、プログラムの内容も学年に応じて多少入れ替えられている。本来可能であれば、幼稚園でも年齢児ごとに行える環境が整うと、園児達をはじめ保育者にとっても満足度の高いものになっていくのではないだろうか。しかし現状は、先行研究を概観

してみても、3～6 歳児 100 名以上の園児を対象に実施されているものや、保育園の事例では、一時保育で預かる 3 歳児未満の子どもも一緒に参加するケース等みられる^{注3}。今回、筆者達が行った音楽コンサートも既述した通り、保育参観も兼ねたクリスマス会と合同で行われた企画で、2～5 歳児までの園児と、その保護者を対象としたコンサートであった。このようなイベント的なアウトリーチの場合、年齢ごとにコンサートを実施することは難しいが、そのような環境のなかでも、より多くの園児達が楽しめるようなプログラムを構成することが、幼稚園でのアウトリーチ活動の可能性を考える課題の一つであろう。林（2003）が、アウトリーチの先進国アメリカで行ったインタビュー調査の中で、子どもの集中力を考慮したアウトリーチプログラムでは、演奏する曲は 2 分以内が原則という話があった⁽¹⁹⁾。山内（2015）の実践事例においても、園児の集中力維持は課題であると述べられており、子ども達が舞台に集中できる工夫として、鑑賞と参加の交互なプログラムや、身体を動かす時間を設ける等の提言をしている⁽²⁰⁾。本研究のアンケート調査においても、どのようなプログラムがあると良いかについて、問 6. で質問したところ、子ども達や保育者も参加できるようなプログラムを望む意見があった。その中には、「子ども達が楽器に触れ合える機会をもっとほしい」といった要望もあった。音楽家が実践するアウトリーチ活動では、弦楽器、管楽器、声楽といった様々な領域の音楽家が協働して行うコンサートが可能である。筆者の経験においても、例えば、ヴァイオリニストが子どもサイズの楽器を用意し、子ども達に音を出す体験ができるような時間を設けたことがあった。今回のような大人数のコンサートでは、そのような例は難しいかもしれないが、園が所有する簡易楽器を用いてコラボレーションすることでも、子ども達は音楽に親しめ、保育者もその姿を見ることで、日常の保育では気づかなかった子どもの感性や表現力を発見できる機会となり、そこにアウトリーチの意義が見出せるのではないだろうか。

その他の意見では、選曲について「子どもが知っている曲、よく歌う曲」を、ほとんどの保育者があげていた。「アニメやキャラクターの出ている曲や話だと興味をもって真剣に参加できるのでは」といった意見もあった。これらの結果から、興味関心のあるプログラムで子ども達の心が惹きつけられ、コンサートを終始飽きずに参加できているかどうかという点に、保育者の主眼が置かれていることが示唆された。

3-2. ビデオ記録の分析と考察

本節では、音楽コンサートのビデオ記録を分析する。録画した内容をプログラムごとに区切り、子どもの発した言葉や行動について詳細に文字化する。そうすることで、プログラムごとの子ども達の興味や反応の違いが明確になり、実践時には気づかなかった子どもの様子を捉えることができる。また、映像を介して実践を振り返る際に中坪（2012）は、映像の中の実践を、解説するように振り返ることが重要であると述べる⁽²¹⁾。つまり、自身の経験知や既得の知識を用いて言語化することにより、自己の実践を改めて熟考する機会となるのである。以上を踏まえて、ビデオ記録をプログラムごとに区切り、子どもの言動を詳細にあげながら解説する。

1. ディズニーメドレー（ピアノ連弾）

エレクトリカルパレードのオープニングメロディーが聞こえてきた瞬間、多くの園児がピアノの方に顔を向け、「これ知ってるー」「ミッキーマウスの曲だ！」と口々に声があがり、興味深く演奏に耳を傾けていた。プログラムの最初ということもあるのか、音楽に合わせて体を揺らしたりする姿は見られず、じっとピアノの方を見ながら音楽に聴き入っている様子であった。

2. 映像と演奏による「どうぶつたちのカーニバル」

どうぶつたちのカーニバルを始める前に、司会者が「動物の国って知ってるかな？どんな動物がいるでしょう？」と、園児に向かって質問をした。すると、「ライオン」「パンダもいるよ」「象、象さん」「りすもー」等、口々に元気な声が返ってきた。動物たちの国にまつわる話だとわかり、舞台前方の大きなスクリーンに動物たちの画像が大きく映し出されると、気分が高揚した様子で「わぁー」と歓声が起こり、賑やかになった。司会者が朗読を始めると、空気を察したように静かになり、鑑賞する態勢に入ることができた。

有名な組曲に合わせて、次々とスライドが切り替わる瞬間は、スライドとピアノに視線を行き来させながら、比較的集中して熱心に聴いていたが、スライド自体が静止画像のため、「歩いてないよー」「止まってるよー」と、時折不満気な声があがる。また、次のスライドに移るまでの間に演奏が1分以上続き、その上、耳慣れない音楽であると興味を示さず、左右前後を見回したり、周囲の友達と私語する等、若干落ち着かず騒がしくなった。園児達にも耳覚えがある快活な音楽や、音量が豊かで華やかな組曲が流れる際、或いはスライドと曲想の展開が早く、スピード感のある場面になると、集中して鑑賞できていた。この曲の演奏が終わった後、司会者が園児達に感想を尋ねると、「楽しかったー」「たくさん動物出てきた」「カンガルーや白鳥も覚えてるよ」と、歯切れの良いコメントが返ってきた。

3. クリスマスメドレー（ピアノ連弾）

プログラム最後のクリスマスメドレーでは、曲の途中から、司会者が手に持った鈴でリズムを刻み始めた。すると園児達は、一斉に鈴の音が響く方を注目し、次はどんな曲が流れてくるのか待ち遠しいような雰囲気になった。そして、メドレーの最後「ジングルベル」のメロディーが始まると、ビートに合わせて体を揺らす子どももいれば、上半身でリズムを刻んだり、自然に歌やメロディーを口ずさむ等、各々が音楽に合わせて自分が感じたものを表出し、音楽を楽しんでいる様子であった。司会者が「さあ、みんなも一緒にどうぞ！」と歌い出しの合図を出すと、子ども達はタイミングよく「ジングルベル、ジングルベル」と手拍子をしながら笑顔で歌い出した。横で見守る保育者も、子ども達が楽しそうに歌う姿に表情が和み、子どもたちと時折、顔を見合わせたりしながら共に音楽を享受しているようであった。

以上、プログラムごとに区切ったビデオ記録の解説をみると、最初の演目であった「ディズニーメドレー」と、最後の「クリスマスメドレー」において、子ども達の集中度が高かった。知っているメロディーが流れてくると口々に声があがり、その様子は保育者のアンケート記述にも「知っている曲が流れていると『小さな世界だ』と言って口ずさんでいた」と、印象的な反応として捉えられていた。子どもの知っているメロディーが盛り込まれたメドレー作品は、知っている曲を探し出そうと、子ども達が演奏によく耳を澄まして聴き入っている様子が窺われ、集中度を高めるのに効果的であった。また、曲の展開が早く、演奏時間が3分程度であったことも集中して聴くことができた要因であったと考えられる。

プログラムの2番目であった映像と音楽による「どうぶつたちのカーニバル」は、お話し付きのクラシック組曲として大変有名な作品であり、幼児を対象としたアウトリーチでもよく取り上げられる。今回は特に、低年齢児の参加も配慮して、作品を全体的に簡略化した。また、子ども達が物語の中で登場する動物達のイメージを膨らませながら音楽を鑑賞できるよう、ナレーション付きの映像と音楽にアレンジした。しかし結果として、この演目に関して、特に2、3歳児は長く感じたようである。ビデオ記録の解説にもあるように、次々とスライドが切り替わる瞬間は、スライドとピアノに視線を行き来させながら比較的集中できていた。しかし、次のスライドに移るまでの間に演奏が1分以上続いたり、耳慣れない音楽であると、落ち着きがなくなり全体に騒がしくなった。これらのことから、いかにテンポよく展開させ、子どもの集中力や興味の持続に繋げられるか検討する必要がある。また、今回の映像が静止画像であったことで、時折、「歩いてないよー」「止まってるよー」と、子ども達の不満気な声もあがっていた。アニメやタブレットによるゲームをはじめ、インターネット配信等で日頃から動画に慣れ親しんでいるなか、動きのない画面では物足りなさを感じたようである。動画が必ずしも良いとは限らないが、登場人物に動きがあることで表現の幅も広がり、子ども達も自分なりのイメージを膨らませながら、より物語の内容に興味を持って関わるができるのではないだろうか。静止画で実施するのであれば、スライドごとの音楽を縮小し、テンポよく場面展開させていく工夫が必要である。また、現代

の流れに沿ったデジタル紙芝居の可能性も検討の余地がある。

最後のプログラムでは、子ども達も参加して音楽に合わせて歌うことにより、演奏者と子ども達はもちろんのこと、その場にいる保育者や保護者も一体となって音楽を享受しているようにみられた。このような瞬間こそ、音楽アウトリーチの価値が発揮されているのではないだろうか。

4. 総括

本研究では、筆者達が実際に行った実践事例をもとに、幼稚園での音楽アウトリーチ活動の可能性として、単発のイベント的なコンサートから継続的なものへとつなげていくための考察を試みた。その結果、以下の 3 つの課題が浮かび上がった。それら課題と共に、実践者側の働きかけによってアウトリーチ活動を継続的なものへとつないでいく展望について言及する。

まず一つ目の課題として、幼稚園での音楽アウトリーチ活動の意義を見出し、実践者が保育者にそれを伝え、理解と協力を得ることがあげられる。今回のアンケート調査においても、ほとんどの保育者が子ども達に音楽コンサートの機会を与えてあげたいと望んでいる一方、その開催回数については、半数以上が「年 1 回」と回答していた。この結果からも、未だ幼稚園でのアウトリーチ活動は、日常の保育とは別個に考えられたイベント的な要素として捉えられている傾向にあるといえる。音楽の力は大きいといえども、それによる子どもの育ちや変容は、一朝一夕にみられるものではなく、長期的な目でみていくことが大切である。石川（2007）は、幼稚園での継続的なコンサートで体験した様々な活動が、子ども達にとって魅力的な素材として、遊びのなかで駆使されていたことについて、「大人が発信した音楽という既存の文化以上に、受け取った子どもは多様なものを吸収し、そこから引き出したものを自分達の文化に自在に取り込んでいく力を持っている」と述べる⁽²²⁾。このように、子ども達の生活の中に音楽が根付き、それが彼らの育ちにおいて何らかの影響をもたらすには、やはり一回限りのコンサートではなく、継続的なものとして定着していく必要がある。地域創造（2010）が、小・中学校の教員に行った調査の中で、「アウトリーチ活動の継続を検討する上で、どのような資料や情報が必要ですか」という問に対し、半数近くの教員が「アーティストが過去に行ったワークショップや、ミニコンサート等の記録ビデオ」をあげていた⁽²³⁾。初めて取り組む企画について、どのような活動が目の前で展開されるのかを、教員はあらかじめイメージしておきたい所以であろう。それは保育者でも同様であり、アウトリーチ活動の目的や内容について、実践者側が伝える際、活動記録の映像を用いることは、保育者がある場をよりイメージしやすくなるという点において、有効ではないかと考える。加えて、継続的な活動への理解としては、その活動を通じて園児に獲得させたい力、できるようになって欲しいこと等、保育者側の意見も取り入れながら展開していくことが求められることを伝える必要がある。また、活動内容が、幼稚園教育要領のねらいや内容を、適切に踏まえたものとなっているか思料することも必要であろう。すなわち、継続的なアウトリーチでは、実践者である音楽家の一方的な提供ではなく、保育者との協働による音楽活動の実践が要となる。実践者はその点を踏まえた上で、幼稚園における音楽アウトリーチ活動の意義を問うていきながら、保育者の理解と協力が得られるような発信力を養っていかなければならない。

続いて二つ目の課題として、その場の状況や、参加する幼児に相応しいプログラムの構成があげられる。単発のアウトリーチではインパクトの強さが先行するため（梶田，2011）、30 分という短い時間のなかで、いかに子ども達の心を惹きつけ、魅力的なコンサートにするかが重要である。併せて、今回の実践でも経験したように、参加する子ども達の集中力を高める工夫も必要である。既述したように今回のアンケート結果から、保育者はコンサートのなかで、子ども達の心がいかに惹きつけられているか、飽きずに参加できているか、という点に主眼を置いていたことが示唆された。新原他(2015)のアウトリーチ研究においても、保育者は、音楽に合わせて体を動かす子どもの姿や、実践者を注視する様子について重視しており、その結果、体を動かすことを目的としたプログラムや、子どもの興味を惹きつける内容のプログラムを肯定的に捉えていたと論じている⁽²⁴⁾。つまり、幼稚園でのアウトリーチ活動において、幼児の心をいかに惹きつけ、楽しんで参加できているかが重要な視点であり、またそれが、

活動の評価にもつながるということである。今回の実践では、低年齢児の参加を配慮して物語を簡略化し、視覚的な映像も作成した2番目の演目について、既述した通り、保育者の担当クラスによって意見が2分した。昨今、認定こども園の増加に伴い、在園児の年齢も幅広くなったことから、特に低年齢児の子どもも楽しめるプログラムの考案は、幼児の発達段階ごとの特徴も踏まえた上で検討していかなければならない。次に、その場の状況に相応しいプログラムに関して、例えば、楽器に触れる体験等においても、参加人数によっては、どのような形で円滑に進められるか配慮しながらプログラムを立案していかなければならない。そのためにも、あらかじめ実施園との事前打ち合わせの中で、会場となる環境の把握はもちろんのこと、参加園児の人数や年齢、さらには園児の日常における音楽遊びや、音楽経験の実態を知り、その園に相応しいプログラムを構成することが大切である。

そして最後3つ目にあげる課題は、既述の二つの課題を達成する上でも不可欠である、保育者と実践者のコミュニケーション構築である。筆者達も、今回実践させていただいた園との関係はまだ浅く、プログラム立案の段階において双方に遠慮もあり、大方の構成を筆者達が提案する形で進めた。しかし、事後アンケートには、保育者一人一人の思いが寄せられており、それがもっと事前に聞き入れられ、コンサートの中に反映されていれば、という点において、保育者との連携が不十分であったことが反省として悔やまれる。単発のコンサートであればそれでも成り立つのかもしれないが、継続的なコンサートは、既述の考察からも明らかであるように、実践者と保育者との連携があつてこそ成り立つ活動であり、プログラム立案の段階から保育者との意思疎通を図っていかなければならない。また、アウトリーチ活動を継続的に行っていくなかで、その効果をみていく際には、保育者の専門的な視点が絶対的に必要である。そうした意味でも、音楽家と保育者とのコミュニケーション構築は、幼稚園における音楽アウトリーチ活動の可能性の鍵となるのではないだろうか。

5. おわりに

音楽が子ども達の生活に根付き、彼らの育ちに何らかの影響を及ぼすことができればどんなに幸せだろう。そのような思いで保育施設へ出向き、アウトリーチ活動を行っている音楽家は多い。しかし、継続的な活動として実施していくには様々な課題がある。音楽と教育の両面に携わる者として、本研究で明らかになった課題に取り組みながら幼稚園での継続的なアウトリーチ活動の実施と、その効果に関する検証を進め、今後も可能性を模索していきたい。

【注】

注1：文化・芸術の振興による創造性豊かな地域づくりを目的として、全国の地方団体等の出捐により1994（平成6）年に設立された一般財団法人である。財団事業として、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成や、公立文化施設の活性化を図るための各種支援事業（音楽・ダンス・演劇・邦楽・美術・助成）など、多彩なプログラムが実施されている。

注2：ここで示す%の母数は、アンケート調査を実施した劇場・ホール42（館）である。

注3：新原将義他（2015）が行った保育園での実践では、在園児、保育者の他に、一時預かりの3歳未満児も参加した計60名の乳幼児を対象としたコンサートであった。また、山内（2015）の実践では、園児だけでも100名を超えている上、その保護者も一緒に参加する形で行われており、大規模なコンサートであったことがわかる。

【引用文献】

（1）梶田美香（2011）「転換するアウトリーチ：音楽科教育への貢献」名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士論文，pp.70

（2）原尚志、山中和佳子、木村次宏（2016）「音楽アウトリーチ活動の実際と展望」福岡教育大学紀要第65号第6分冊，pp.2

（3）投野由紀夫編（2012年）「outreach」『プログレッシブ英和中辞典』第5版，小学館，pp.1416

- (4) 中央法規出張編集部編 (2001 年)「アウトリーチ」『新版 社会福祉用語辞典』初版, 中央法規出版, pp.1-2
- (5) 文部科学省「アウトリーチの活動の推進について」インターネット
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/008/siryo/attach/1342833.htm (参照 2018-2-16)
- (6) 梶田美香 (2009)「音楽教育哲学から鑑賞教育への示唆 (3)」名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究第 12 号, pp.156
- (7) 林睦 (2003)「音楽のアウトリーチ活動に関する研究: 音楽家と学校の連携を中心に」大阪大学大学院文学研究科博士論文, pp.1-2
- (8) 池上淳、端信行他編 (2001)『文化政策入門』丸善株式会社, pp.21-22
- (9) 文部科学省「芸術鑑賞機会の充実」インターネット
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318528.htm (参照 2018-2-16)
- (10) 齊藤豊 (2013)「特集投稿 音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開ーアウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試みー」音楽教育実践ジャーナル vol.10no.2, pp.76-77
- (11) 前掲 (7), pp.4-5
- (12) 前掲 (1), pp.109-111
- (13) 財団報人地域創造 (2010)「文化・芸術による地域政策に関する調査研究」インターネット
http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/20-21/data/20-21_1.pdf (参照 2018-2-26)
- (14) 財団法人地域創造 (2001)「アウトリーチ活動のすすめ 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究」平成 12 年度調査報告書, pp.23
- (15) 前掲 (1), pp.13-14
- (16) ヤマハ音楽研究所 (2013)「現代における子どもと音楽とのかかわりー4、5 歳児の保護者へのアンケート調査の結果からー」インターネット http://www.yamaha-mf.or.jp/onkenp/wp-content/themes-onken-shared-pdf-report-rpt004_parents2013.url(参照 2018-2-16), pp.18-19
- (17) 山内信子 (2015)「就学前施設の音楽アウトリーチ活動における演奏者と聴衆の相関関係に関する一考察」聖和短期大学紀要第 1 号, pp.67
- (18) 石川眞佐江 (2007)「幼稚園における継続的な園内コンサートの試みー中瀬幼稚園での実践事例をもとにー」音楽教育研究ジャーナル第 28 号, pp.6
- (19) 前掲 (7), pp.188
- (20) 前掲 (17), pp.64-66
- (21) 中坪史典 (2012)『子ども理解のメソドロジー実践者のための「質的実践研究」アイディアブック』ナカニシヤ出版, pp.73-83
- (22) 前掲 (18), pp.9
- (23) 前掲 (13)
- (24) 新原将義、大澤愛、茂呂雄二 (2015)「幼稚園・保育園での音楽アウトリーチに関する保育者の語りの質的検討ー修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてー」音楽教育学第 45 巻 1 号, pp.1-12

【謝辞】

本研究にあたり、実践にご協力いただきました K 幼稚園の園児達、先生方に心より感謝申し上げます。